高校生活と探し物

撫子 雪姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
高校生活と探し物

【Ｎコード】
Ｎ８７４６Ｚ

【作者名】
撫子　雪姫

【あらすじ】
非日常な日々と探し物。いろいろなことに巻き込まれていく彼の運命は・・・・・？

入学試験と拷問（前書き）

初めてですので、お手柔らかにお願いします。

入学試験と拷問

こ、ここが俺の受験の高校、あああ高校（仮）かぁ・・・
ん？（仮）って…まだ名前が決まってないのかな？
そうなら適当すぎるだろ・・・

先生に勧められて入ったんだけど、どういう高校なのか、謎だ。
ネットで調べても、都市伝説ばかりだし・・・
都市伝説によると、頭や運動神経がかなりいい人たちが集められるとか・・・
この先不安だ。

俺はその不安を振り払って、試験会場へ向かった。

試験会場に入ると、重苦しい雰囲気が俺を襲った。
プレッシャーというか、なんというか、とにかく空気が張り詰めている。
ここから早く逃げ出したいくらいの空気が俺の具合を悪くする。
・・・腹が痛い。
うわ、最悪。こんなときに・・・
と・・・・トイレに行こう！今ならまだ間に合う！！・・・気がする！！

ジャーーーー

「ふぅ・・・今何ｚっっ！！やばっ！！１０秒前だし！！」

この時計は正確なのかどうか知らねぇけど、完全に遅れる！！

俺は全力で走った。走りまくった。

ガラッッ

「セ・・・・セーフ？・・・・なの・・・・・・か？」

しーーーーん

うう・・・アウトか？

「早く席に着け、天神どくろ＜アマガミ　ドクロ＞」

セーフ？　セーフなのか？

まぁいいか。　とにかく座ろう。

「私は担当の希咲遥＜キサキ　ハルカ＞だ。」

おお、よく見たら超美人。

「では、今から筆記試験を開始する。ヘタな真似をしたら即失格だ。いいな？」

プリントが配られる。

「開始っ！！」

バッ

おお！？なんだこれ！？超難しいじゃねえか！！普通なら絶対に解けねえぞ！！

…だが俺は普通ではない！天才秀才天神どくろ様だ！

・

・

・

筆記試験が終わるころには、俺はゲッソリになっていた。

「な・・・なんなんだあの問題は・・・拷問並みに難しいぞ・・・」

「おい！まだバテるなハゲ！！次はもっときついのがあるんだぞ」

・・・え？

「ふん、聞いて驚け。いや、これを聞いて驚かない者はいない。いや、すこしはいるかもしれんが・・・」

な、なんだ？

「体力試験だ！！」

へぇーー・・・・・ふぇ？た、体力試験だと？そんなの聞いてねえよっ！！

「ふふふ、私には見えるぞ。貴様らのバテる姿が。」

いやいやいやいやまじで無いわーまじありえねぇしーマジ聞いてねえしー

「さぁ、移動するぞ。体育館に」

☆続く☆

入学試験と拷問（後書き）

かなり読みずらいと思いますし、ヘタクソだと思います。
最後まで読んで下さった方、ありがとうございます。

入学試験とと拷問２（前書き）

書けるときは書かないとって思って２話目です。

入学試験とと拷問２

た・・・体力試験だと！？
も、もちろんやってやるさ！母ちゃんに約束したからな！
長い廊下を歩いて２分。ようやく体育館についた。

「よく聞け。今から３人一組のパーティーを作ってもらう。好きな相手でも何でもいい。」

え。よく見たら知ってる人いませんけど。これ俺残るパターンじゃね？

「ん、じゃあもう組んでいいぞ。必ず３人一組な。確実に余らないからな。制限時間１０分。」

や、やってやるぜ！！余らないんだからな！
たぶんこれは積極性とかいろいろ見られると思うぞ！俺的に。

まぁまずは、なんかみんなに話しかけられなくてモジモジしている女の子に限る！！なんかかわいいし
と思ったらさっそく発見！！ポニーテールの茶髪の女の子！かわいい！！ものすごく！！
あの子すげーモジモジしてるぞ。
とりあえず話しかけてみるか。

「あ、あの～俺と一緒に組みませんか？あ、無理ならいいんだけど・・・」
「え！？嘘！！本当ですか！？ありがとうございます！！誰にも話しかけられなくて、もう無理かと思いました（ニコッ）」

か、かわええ～／／／／

「名前、なんていうんですか？あっ私、春色咲楽＜ハルイロ　サクラ＞っていいます」

「俺は、天神どくろ」

すごく魅力的な名前だ。咲楽ちゃんの雰囲気にそっくりだ。

「私、同じ学校の人連れてきますので、少し待っててください」

咲楽ちゃんは大きく息を吸うと、精いっぱいの声で、

「巻くぅーーーーーーん！！！」

４秒後

「なんだ？」

「さっすが巻君！早いね！俊足だね！」

お、黒髪セミロングのナイスガイだ。

「どくろくん！紹介するね。巻蓮＜マキ　レン＞君！おさななじみだよっ」

いつのまにか咲楽ちゃんがタメ語になってる！すげー嬉しいんですけど！！

「あのね、巻君、一緒に組んでくれるよね？」

「あ、あたりまえだ。」

こいつ、咲楽ちゃんの可愛さに一撃でやられたな

「よろしくなっ！蓮っ　俺の名前は、「天神どくろだろ。」
う、あの腹痛事件（？）で一気に目立ってしまったか。
「あ、言い忘れてしまっていたが、パーティーが組めた次第、あそこの受付で登録してもらえ。」
おいおいおいおい、言い忘れるなよな。試験管だろ。一応。
「さ、パーティーも組めたところだし、さっそく登録しに行くか。」
「いえっさぁー！」
おい待て、なぜ貴様が仕切っている。ま、いいけどな。
「そうだなっ。さ、行こうぜ！」
・
・
・
「よし、これで全員組めたな。ドアを開けたらアスレチック的なものが待っている。ゴールまでパーティー全員でたどり着くんだ。いいな？」
よーし、気合入れいいくぜぇー！！！
☆続く☆

入学試験とと拷問２（後書き）

最後まで読んで下さった方、ありがとうございます。
一瞬でも読んで下さった方もありがとうございます。

入学試験と拷問３（前書き）

３話目です。
よろしくおねがいします。

入学試験と拷問3

ガチャ
体育館の扉が開かれた。

・・・・・広っっっ！！
どれくらい広いかというとものすごぉぉぉぉぉぉぉぉぉく広い！！
その体育館の中にかなり大きいアスレチック的なものがあった。
それもまた、ゴールが見えないほどの大きさだ。
たぶんトラップなどという仕掛けもあるのだろう。

「ゴール、できるかなぁ？」
「大丈夫じゃね？何とか」

頑張れば何とかなる！！たぶん・・・

「お前、頑張れば何とかなる！！・・・とか考えてないよな？」
「う・・・・・計画的に頑張ればいいと思います。」

何だこいつ！読心術でも使えるのか！？

「では、行くぞ！フライングはなしだからな。」

ＯＫ！！遥先生。

「よぉーい・・・・ドン！」

遥先生の掛け声により、いっせいに全員が走り出した。

・　・　・
「チームワークを乱すなよ。ゴールの為にな（ニヤリ）」
・　・　・
「くっそ！超きっつい！！」
ずっと上るのばっかしで、超疲れるんですけど！！
「疲れるね（ニコッ）」
咲楽ちゃん、全然疲れているように見えませんけど？
おまけに蓮なんかは顔色一つ変えやしない。
くそっ腹立つ！
「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！」
「おい！いきなりペースを上げるなバカ！！はぐれたらどうするつもりだ！」
「なっなんだよ！いいじゃねーかよ」
「どこがいいのかさっぱりわからないなバカ！」
「なっバカバカ言うなよ！！頑張ってるじゃねーか俺が！全身全霊

！！」
「お前の頑張りは空回りしてんだよ！」
今にも顔がくっつきそうなくらい顔を近くにして言い争っている。
「巻君もどくろ君も仲良しだね！」
グリンッと咲楽に顔を向けて、
「「どこをどう見たら仲良しに見えるんだよ！！」」
やべぇハモった。
息ぴったりじゃん。
「チッ　オラ、さっさと行くぞ。」
「わかってるっつーの！」
俺は反抗期の息子かよ！！
もう何としてでも合格して蓮を見返してやる！
俺が決意を決めた時だった。
とんっとんっとんっ
木の柱を軽い足取りで跳ぶように進むパーティーがいた。
「なんだありゃ、すごすぎるだろ。」
「すごいね。ねっ巻君！」
「そうだな。」

短髪の赤いマフラーをした男は、首元に狐の入れ墨あって、三つ編みの女は腕に蛇の入れ墨、黒髪のポニーテールの男か女かわからない奴は、背中に般若の入れ墨があった。

不良か？入れ墨とか・・・

まぁ、すごいことに変わりはない。

「あ、思い出した。さっきの入れ墨があったパーティーのこと。」

「有名なのか？」

「ん、まぁな。」

正直、なんとなくだがあいつらは危険な感じがした。

「あいつらの中学校は、超エリート、天明中学校といってな、エスカレーター式のところだ。」

「へぇーやっぱ雰囲気が全然違ったよねー。なんか怖かった！」

咲楽ちゃんも感じてたのか。

なんか超エリートって感じ。嫌味な奴らだ。

まぁ俺も成績は良かったからな。足元にも及ばないことはない。

「でだな、入れ墨があるやつらは特に成績がよかったやつなんだ。ほとんどの高校から推薦がきているはずだ。」

な、すげーーーーーー！！！

ってこの高校そんなにすごい高校だったんだ！！

この先、ちゃんと生きていけるか心配になった。

☆続く☆

入学試験と拷問３（後書き）

半端な終わり方ですみません…
読んで下さった方、ありがとうございます。

入学試験と拷問４（前書き）

４話目です。よろしくお願いします。

入学試験と拷問４

はぁ、疲れた。
なんだこれ、ただのアスレチック的なものじゃねぇだろ！・・・・・
ってか、

「同じところをぐるぐる回ってる気がする。」
「そうかな？」
「俺もちょうど天神と同じことを考えていた。奇遇だな。」

なんだ、蓮もか。

「なんか印でもつけておくか？もしかしたら同じところをぐるぐる回ってるかもしれないからな。」
「おっそれならわかりやすいしな！」
「でもそれじゃぁほかの人にも気ずかれちゃうよ？先に行かれちゃうよ？」

うーーーーん・・・・・・

「あっ！そこにさっきの天明のやつらがいるじゃん！！」
「あの人たちについていけば何とかなるんじゃないかな？」
「そうだな。たまにはできるじゃねぇか。」
「たまにってなんだよ。まだ少ししか関わってねぇじゃねえかよっ！！」
「・・・・・・・・・。」

シカトしやがったこいつ・・・・・
とことんムカツク野郎だなこいつ・・・・

「お前、とことんムカツク野郎だなこいつ・・・・。とか思ってないよな？」
「思ってませーん！！」
やっぱりこいつ読心術使えるだろ！！
「よし、あいつらから目を離すなよ。」
「わかったー！！巻君かっこいー！」
おい、それ考えたの俺だし！！
俺も咲楽ちゃんにかっこいいって言われたいし！！ずりーぞ！！
「おい、天神、ぼーーっとすんな」
はっ俺としたことが！
「あ、あの人たち、なんかあそこをずっとうろちょろしてる！」
「？　あそっこて、ただの行き止まりじゃん。」
ん？あれ？あいつら、何かを探してる？
天明の人たちは、一枚の板を押した。
すると、床の板が落ちて、下に行った。
「！？　なんだありゃぁ！？」
「ただの仕掛けだろ。そろそろほかのやつらも気づき始めているな。」
「じゃぁさっさと行っちゃおぅ！！レッツゴー！！」

どくろ達はさっき天明の人達がいたところに走っていった。
「たしか、ここら辺だったはず・・・・」

ガコンッ

ふっふっふ・・・。
これで一歩合格に近ずいて・・・・・・・・
・・・・・・・・あれ？

ガコンッ

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あれ？

ガコンッ　ガコンッ　ガコガコガコガコガコガコッ

「なぁ・・・・・・・何も起こらないぞ？」
「そうだな。」
「うん。そうだね。」

う・・・・・・うそだろぉぉぉぉぉぉぉぉ！！

どくろは頭を抱えて取り乱した。

「まぁ落ち着けって。これと同じような行き止まりはほかにあっただろ？」
「そこを手当たり次第、さっきみたいに板を押していけば何とかなるよっ！」

蓮、咲楽ちゃん・・・・・・

「応っ！！ゴール目指して頑張ろうぜ！！」

どくろは珍しくキメ顔になった。

「ふん。お前が頑張ろうと頑張んなくても必ずゴールする。」

「うふふ。一緒にゴールしようねっ（ニコッ）」

蓮はとにかく、咲楽ちゃんのスマイル最高ぉぉぉぉ！！

「うぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！なんかやる気出てきた！！いっくぜぇぇぇぇ！！」

「だぁぁぁかぁぁぁらぁぁぁ！！お前一人で先に進むなよ！さっきも言ったけどはぐれたらどうするんだ！」

「うっせぇなぁ」

「お前のほうがうるさい！！」

「お母さんかよ！」

「ちげぇよ！！」

なんだよこいつ！！俺にばっかりつっかかってきてよ！

「二人とも本当に仲がいいねぇ」

「「どこがだよ！！」」

咲楽ちゃん！！おれ、こいつ苦手だ！！

なんでパーティーに入れたんだよ！！幼馴染だからって性格悪すぎだろ！！

ちょっとかっこいいからって調子に乗るなよ！

俺のほうがかっこよくて愛らしくて素直だもんねっ！

「お前、心の中で俺を馬鹿にした挙句、自画自賛しただろ。」
「？　咲楽ちゃん、自画自賛って何？」
「自分で自分を褒めることだよ。」

へぇ～そうなんだ。っじゃなくて！！

「ちげーよ！いや、そうじゃないけど、えぇぇぇぇと・・・・そ、そうだよ！俺は自分のことを褒めました！褒めまくりました！なんか文句あっか！！」
「そうか。そのことについては特に文句はない。だが、じゃあ俺を馬鹿にしたことについては？」
「かなり馬鹿にしたぜ！性格が悪くて、ちょっとかっこいいからって調子に乗ってるってな！！」
「はぁ！？いつ俺が調子に乗ったんだよ！」
「さっきからずっとじゃボケェ！！」
「意味わかんねぇよ！」

あああ！！もうしらねぇ！！どうにでもなっちまえ！

「二人とも、喧嘩はやめようよ。」

咲楽ちゃんがなんと言おうと構うか！！

「もぉいい！！知るか！！俺一人で行く！！」
「どくろ君、一回落ち着こうよ」
「落ち着けるか！全ては蓮のせいだ！！」
「はぁ！？なんでだよ！！」

そうだ、全ては蓮のせいだ。俺がせっかくやる気を出しているのに・・・・。

「おい、お前希咲先生の話、ちゃんと聞いてたのか！？パーティー全員でっｔ「俺は先に行くからな！！」

そう言うと、どくろは足早にその場を去った。

「はぁ・・・・・。ったく、どんだけわがままなんだ。天神どくろってやつは・・・・・。」

☆続く☆

入学試験と拷問４（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。
これからどくろ君はどうなってしまうんでしょうね（笑）

入学試験と拷問５（前書き）

５話目です。
入学試験と拷問シリーズがやけに長いですね。
よろしくお願いします。

入学試験と拷問5

「ったく、蓮のやつ、ほんっと腹立つなぁ・・・・」
もともとあいつが悪いんだ。もうどうなっても知らん。
「えっと・・・行き止まりを探せばいいんだっけ。」
どくろは、手当たり次第に行き止まりを探した。
「・・・どうしよう、ぜんぜん見つかんねぇ・・・・」
やばいやばいやばい。どうしよう。
・・・・・不覚。
こんなときに咲楽ちゃんと蓮の顔が思い浮かんでしまった・・・・。
「これって完全に迷ったんじゃぇか？え。嘘。マジ！？どうしよう。」
なんで一人で飛び出してしまったんだろう。
ちゃんと咲楽ちゃんは心配して・・・・あれ？
そういえば蓮もちゃんと忠告してくれたよな・・・・・・はぐれたらどうするつもりだ！って・・・・
「はは・・・・はは・・・・はははは・・・・。」
結局全部俺のわがままだったんじゃねーかｗｗ
そう、やる気とかいろいろ言ってさ。
ふはははは。なんか笑えてくるぜ！

なんだっけ、そういえば遙先生がなんか言っていたはず・・・・・
はっっ！！！！

「ゴールは全員でたどり着かなきゃいけねぇんじゃねぇかよ！！」

たしか蓮もそういうこと言ってた気がする！！
なんだよ！！全部蓮が言ってたじゃん！！
・・・・なんか悔しい。
今頃咲楽ちゃんと蓮は必死に俺のこと探しているだろうなぁ。

「うっし！行くぜ！待ってろよ！咲楽ちゃん！！蓮っ！！」

どくろがそう言った瞬間、

「その必要はないぞ。バカ。」
「ふふ。こんなところにいたんだ。探したよ？迷子のおバカさん。」

上から蓮と咲楽が降りてきた。

「え？蓮？咲楽ちゃん？」
「ったく、勢いよく飛び出したと思ったら、２００メートル以内にいるとは思わなかったぜ。」
「けっこう遠くまで探したんだよ？」

咲楽ちゃん、蓮・・・・。
俺・・・・・・・俺・・・・・・・・・幸せ者だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！

「うぅ、ごめん。わがままで、自分勝手で・・・・」
「いや、俺こそきついことを言ってしまったな。」

「喧嘩両成敗だねっ！」
「あぁ、そうだな。」
俺、このパーティーでよかったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！
「うわっ！鼻水垂らすなバカっっ！汚ねぇ！！」
「おふぇ、ファンぢぇぎゅしちゃぎゃビィヴゃびゅヴぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！」
「何言ってるわかんねーよ！！」
・
・
・
「ふぃーーーー」
「やっと落ち着いたか。」
どくろはさっきまで涙と鼻水が止まらなかったのだ。
「ほら、さっさといくぞ。だんだん人が少なくなってきてる。」
「あ、本当だぁ。」
「すまん。涙と鼻水の２ＴＯＰが止まらなかったんだ。」
ちょうど目の前に行き止まりがあった。
「お、ちょうどいいじゃん。」
「よし、そこに乗れ。じゃ、押すぞー。」

ガコンッ

「！！」

「ぅおっ！！」

「きゃっ！」

ものすごいスピードで落ちていく。

下にはあっという間についた。

「早かったな。」

「そうだね。」

「うん。」

なんか、さっきの楽しかったな。ガコンッっていう感じ。

「よし、行くぞ。天神、さっきみたいなこともうすんなよ。」

「わかってるっつーの！」

しばらく歩いていくと、丸太一本があった。

「え？ここを歩くの？」

咲楽ちゃんの顔が青ざめている。

「大丈夫か？咲楽。」

「全然大丈夫じゃないよぉ・・・・・。こわいよぉ・・・・・・。」

こんなこと思うのは失礼かもしれないが、怖がってガクガクしている咲楽ちゃんはすごくかわいい。

「ふぇ？」

蓮がひょいっと咲楽をお姫様抱っこした。

ず、ずるいぞ！！蓮っっっ！！！！

「はぁ、ちゃんと飯食ってないだろ。肉食え。肉。」

「ちゃ、ちゃんと食べてるモン！」

なんだこの二人との関係は・・・・・。

は、入れる気がしない。二人の間に花が咲いてるぞ。

「れ、蓮。その状態で行くのか？」

「あたりまえだろ。」

「す、少し恥ずかしいけれど、巻君なら安心できるし、信用してるんだっ！」

NOぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！

破★局

なんなんだ。あの二人の間にあるものは！！これがおさななじみというやつか！！

べ、べつにうらやましいとか思ってねーしぃー

そんなん1ミリも思ってねーしぃー

「？　何変な顔してんだ。」

「べっべっつにー。」

「ふーん。じゃ、行くぞ。」

ぅわ、意外と怖いぞこれ。

え！？なにスイスイ進んでんの！？蓮のやつ！！

「咲楽、下、絶対に見るなよ。見たらお前、必ずというほど暴れるからな。小さいころ、お前のせいで落ちたからな。」
「あ、あれはかなり怖かったんだもん！しょうがないじゃん！」

くそ、イチャイチャしやがって。
あ、もう少しで終わるな。余裕余裕！

「ふぅ、結構長かったな。この丸太。」
「どくろくーーーーん！あとちょっとだよぉ！がんばれー！」

おぅ！言われなくてもがんばってるＺＥ！！
あと１歩！！

「あぁ、やっとおわっ！！！！！！！！！」

ズルッッッ

「はぅぁっっ！！！！！」
「どくろくん！？」
「ちっ！」

パシィィっっ
間一髪のところで蓮はどくろの手をつかんだ。

「・・・・・大丈夫か？」
「う・・・・ん。何とか。」

咲楽ちゃんは目をきらきらさせている。

「何ガン見してんだよ。咲楽。」
「いやぁ、なんかこういうのかっこいいなぁって思って！！」
「ありがとうな。蓮。」
「ふん。当たり前なことをしたまでだ。」
「こっこれって正面から素直にありがとうって言われると照れるっていうやつ？巻君。」
「だっ誰が照れるか！！」
「照れんなってｗｗｗｗ」
「だから照れてねぇ！！！！」

それから坂を上ったり、１枚の板を渡ったり、ロッククライミングみたいなのもやった。

・
・
・

「このアスレチック的なもの、すごく手が込んでるよな。」
「そうだな。」
「つかれたぁ～」

お！？あれは！！まさかの！？

「ゴール・・・・・だな。」
「やったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
「ほら、最後はみんなでゴール！だよね？」
「あたりまえだ。」

みんなでいっせいにゴールへ足を運び入れた。
ゴールに待ち構えていたらしい遙先生が、

「１５０組中６４位・・・・か。なかなかいい成績だな。ゴールやつしたやつらは面接に行っている。そこにある紙を持っていけ。入り口から出てすぐの曲がり角をまっすぐ行け。一番奥の部屋が面接室だ。」

そう言って話を終わらせた。どうやら質問は受け付けないらしい。

☆続く☆

入学試験と拷問５（後書き）

多分けっこう長く書いた気がします。
読んでくださってありがとうございます。

面接と帰り道（前書き）

5話目です。よろしくお願いします。

面接と帰り道

面接はありきたりなものだった。
なぜこの高校に入ろうと思ったのかとか、この高校に入ったら何をしたいのかなどなど・・・
天神どくろはただ1つ気になる質問があった。

「君は、死ぬ覚悟がありますか？又はどんな困難にも立ち向かうことができますか？」

え？何その質問。

どくろはその質問にすぐ答えられなかった。

なんか非日常なことが起こるのか？この高校は。まぁとりあえず・・・・

「場合によってはできると思います。」

面接官はこの答えに少し驚いたらしく、少し眼を見開いた。

え。なんか変な答え方したかな。ただでさえ怖い顔つきなのにさらに怖くなった気がする・・・・・

「（ボソッ）普通の人ならばすぐに死ぬ覚悟あります！とか、できますっ！って答えるのにな・・・。」

なんかつぶやきました？え。なになに。気になるんですけど。

・　・　・

「ふぁぁぁぁぁ！！！緊張したぁぁぁぁ！！」

5メートルくらいうしろから、

「どくろくーーーーん。」

こっ！この声は！！

「咲楽ちゃん！！と・・・・・蓮！！！」

何であいつもいるんだよっ！！いや、べつにいいけどさ。

「どうだった？緊張した？」

「まぁね。ってかさ、面接官怖くなかった？」

「超怖かった！！目つきが悪かった！！」

やっぱり怖かったよね！！

「じゃ、私達家こっちだから。バイバーーーイ」

ブンブンと手を振っていたので、どくろも手を振り返した。

やっぱりかわいいなぁ・・・・・。咲楽ちゃん。

俺はこれから起こる数々の困難を知る由もなかった。

☆続く☆

面接と帰り道（後書き）

短いですね。
そうです。平均的に文字数が少ないんです。
読んでくださってありがとうございます。

合格発表といきなり明後日（前書き）

7話目です。
よろしくお願いします。

合格発表といきなり明後日

天神どくろは今、ドキドキしすぎて死にそうです。
朝起きてからも、なんかパッとしないし、電柱に頭を１２回ぶつけました。
そう。今日はついにこの日。
合格発表の日なのです。

「のぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！しまったぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

やばい。実にやばい。
・・・・・・迷ってしまった。
いや、ちゃんと理由はあるんだ。
その・・・・・・。いろいろと考え事をしていたら、電柱に頭をぶつけまくって、意識が朦朧として・・・・・・いやいやいやいや、待てって。別に言い訳なんかじゃ・・・・・・。
・・・・・ってかさっきから俺は誰に何を言っているんだ。うん。
自分と日本語で会話をしてっ・・・・・はぁ。これからどうしよう。

見たこともない景色に動揺を隠せない。まるで知らない世界に放り込まれたような、一歩も踏み出せないあの感覚。しばらくすると、後ろから聞いたことのある声が聴こえてきた。

「天神？何をやってるんだ？こんなところで。お前の家はあっちじゃn「蓮んんんんんんんんんん！！！！！！」

よかったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！俺は一人じゃないんだぁぁ

ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！

「お前、まさか迷ったな？どうせぼーっとしてたらこんなところに来てしまったんだろ？はは、お前らしいな。」

お前に俺の何がわかる。全部当たっているけど。

「ったく、咲楽もあそこで悶々しているけどよ。」
「えっ！まじで！？咲楽ちゃん！？」

どくろは一気に復活した！

「ふぇ？どくろ君？」
「久しぶり！！元気でやってたか？」
「うん。おかでさまで（ニコッ）」

久しぶりの咲楽ちゃんスマイルきたぁぁぁぁぁぁぁ！！！！
ヤベェ。テンションあがってきた！！！！

「ほら、さっさといくぞ。」

しばらく歩くと、あああ高校（仮）についた。

うう。さらに緊張してきた。どうしよう！！

目の前を見ると、すごい人の数がひとつの場所に集まっていた。
どくろ達は、ものすごい人の数を掻き分けて、合格者発表が書かれてある紙を見た。

「えーーーーーと。暗号は・・・・・・！！！！」

蓮と咲楽も自分の番号を見つけたようだ。
蓮が、
「とりあえず人のいないところに行こう。ちょうど近くに公園があるだろ。そこに行こう。」
「うん。」
「そうだね。」
・
・
・
「じゃあ、俺から言うぞ。俺は・・・・・・合格だった。」
「おぉ!!さすがだね!!」
「おめでとう!!」
「次は咲楽。」
咲楽ちゃんは・・・・？
「私も合格だったよ!!」
「よかったな!!じゃ、次は天神。」
「俺は・・・・・・。」
全員が息を呑んだ。
「合格だ。」

まさかどくろが合格するとは思ってなかったのか、蓮と咲楽は驚きすぎて声も出せない。

「おいおいおいおい。ちょっと！何かしゃべろーぜ！！しらけるなよ！！」

「いや、まさかお前が合格するとは思わなかったんだ。」

「ちょっ！失礼なっっ！！」

「実は私も・・・・・・。」

「咲楽ちゃんも！？」

そんなにも俺がバカに見えたのか？失礼すぎだぞ。二人とも。

「合格者が持っていけるパンフレットはもってきたな？」

「うん！！」

「もちろん！！」

全員、パンフレットの一ページ目を開いた。

～合格者のみなさまへ～

合格おめでとうございます。

あなたは本校の生徒確定です。入学試験の内容は、誰にも話さないでください。話した方は、それ相応の罰を受けていただきます。

本校は、完全なる全寮制です。家には許可をとらないといけません。

さて、説明はここぐらいにして、ここから大事な話になります。

入学式は、明後日とさせていただきます。今日と明日で荷物を全部まとめてきてください。忘れ物をしても、取りには行けません。制服などは、こちらで配ります。

９：３０　登校時間

１０：００　入学式　　※保護者は同席できません。

＊持ってきてはいけないもの＊
・盗聴器
・盗撮器
・携帯電話
・刃物
・銃
・パソコン
・ゲーム機
・音楽プレーヤー
・録音器具　※校門で持ち物検査をします。

「なんだこりゃ。」
「どっかの組織に狙われてるのか？」
「なんだか恐ろしいねぇ」

ってかなんなんだ。入学式が明後日なんて。早すぎだろ。
それも設定が恐ろしすぎるだろ。この高校。いや、高校じゃねぇな。
多分。
常識じゃありえないし。
なんだか非日常なことが起こりそうな予感がしてきたぞ。

☆続く☆

合格発表といきなり明後日（後書き）

やっとキャラが定まってきた感じがします。
読んでくださってありがとうございました。

入学式と校長先生のお話（前書き）

８話目です。
よろしくお願いします。

入学式と校長先生のお話

今日は入学式。
持ち物チェックは１００回以上したと思う！忘れ物をしたら大変なことになるからな！！

「よしっ！行くか！！」

家には一人。母ちゃんは離婚して今はバツ１。
パートで頑張って働いてくれている。
・・・・・こんなリア充な話は置いといて、今日も誰もいない家に行って来ますを告げる。
かなり重い荷物を持ってドアを開ける。

・

・

・

「よっ！咲楽ちゃん！蓮っ！！」
「あ、どくろくん、やっほー。」
「ん。あぁ。」

しばらく歩くと、長い行列ができていた。

「持ち物検査か。かなり長いな。」
「大丈夫かなぁ。私。」
「大丈夫だよ。」

１０分後

「まだか？」

「まだだね。」

それから３０分後

「まだなのか？」

「遅いね。」

「長すぎじゃね？」

それから5分後

「やっとか。」

「すごく待ったねー」

「半分寝てたぜ。」

持ち物検査は、かばんやリュックの中身はもちろん、ポケットの中や衣服のいたるところを調べられ、金属検査もさせられた。

すごく警戒してるな。怖い怖い。

たしか合格者数は４５０人中１００人だけだったな。

俺が入れたことは奇跡なんじゃないかっていまさら思う。

ま、いまさらそんなこと考えたって何にも変わりゃあしない。

そうこうしているうちに持ち物検査は終わっていた。

おかげさまで誰も引っかかっていない。

・

・　・

廊下にはクラス分けの紙が貼り出されていた。

「あっ！！俺と咲楽ちゃんと蓮、同じクラスだ！！」

「何組だ？」

「１－Ｂだってさ！よかったね！」

「早速行こうぜ！」

「あんまり浮かれるな。恥ずかしい。」

一年生の教室は廊下を右に曲がってすぐあった。

「あった！１－Ｂ。」

「お、寮のメンバーが黒板に貼られているぞ。」

すぐに黒板に駆け寄った。

「え～と・・・・・。どれどれ？」

０００８号室
黒斬ハク＜クロギリ　ハク＞
天神どくろ
巻蓮
細燦渚＜サイサン　ナギサ＞

０３２２号室
鑑紋ライト＜カンブン　ライト＞
春色咲楽

女子A
女子B

な・・・・なんかすごい名前の人キターーーーーーーーーー！！！！！（自分もですけど）
読めないし！

「どこの誰だか知らないがなんかキャラが濃そうだな。」
「ライトちゃんかぁ。きっとかわいい子だろうなぁ。」

この後、制服に着替えて、入学式の準備をした。

・
・
・

「生徒、入場。」

パーパラパパー　チャラリラチャラリラー↑入場の曲

だいだいの流れが終わった。どくろが半分寝かけていたところに、はきはきとした声が響いた。

「生徒代表。黒斬ハク！」

ん？まさか・・・・・・あいつか！！寮が一緒の！
・・・・・・ってあれ？見たことのある・・・・・・天明の奴らのうちの一人か！！

短髪の赤マフラー！
かっけー。マジかっけー。生徒代表とか。
「校長先生の話。赤白躑躅＜アカシロ　ツツジ＞校長先生お願いします。」
やべぇ。校長先生。超美人じゃん。
「えー。あーあーあー。生徒の皆さん、はじめまして。赤白躑躅です。皆さんは、選ばれた生徒です。この高校の名前こそがステータス！なのです。この高校の勉強は、あんまり世間一般な勉強はしませんが、資格はたんまり取れます！そう、この高校は特殊だから！皆さんには、この高校で生活する以上、探し物を捜すという、大事な仕事をしていただきます。詳しいことは、まぁ、担任の先生に聞いてください。命にかかわる仕事もあるかもしれません。それでは、終わらせていただきます。」
校長先生は美しい礼をして、盛大な拍手とともにステージから下りた。
ていうか探し物を探すのに命にこともあるかもしれないってどういうことだよっ！！
☆続く☆

入学式と校長先生のお話（後書き）

やっと題名と絡んできました。
読んでくださってありがとうございました。

高校生活と寮生活のこれから（前書き）

９話目です。
よろしくおねがいします。

高校生活と寮生活のこれから

自分の席は好きなところに座っていいそうで、一番後ろの席に、左が蓮、真ん中が咲楽、右がどくろという席になった。

「担任の希咲遥だ。よろしくな。」

やった！遥先生じゃん！ラッキー！

さっそく教科書などが配られた。かばんは机の横にかけられていた。

「ナニコレッ！超薄いじゃん！」

小学校の教科書より薄いよ、この教科書。

「この教科書は必要最低限に覚えることしか入っていない。たとえば、数学の教科書は計算の方程式や図形や記号のことしか書かれていない。多分。しかし、英語や科学の教科書は分厚いぞ。科学は、薬品とか爆弾などの取り扱いについてとかはしつこく書かれている。覚えるのは大変だが、貴様らは選ばれた人間だからな。」

うぇ～英語とか無理。嫌い。

「あ、校長先生の話であったが、［探し物］という仕事について、だ。」

そういうと、どこからからか取り出した、大きな紙を、黒板に貼り付けた。

「このような、S，A，B，C，Dランクの仕事に大きく分かれる。この後組んでもらうが、三人一組のパーティーで、この仕事をこなしてもらう。これは仕事だからな、ちゃんとあとで報酬は出るぞ。探し物の仕事を簡単にこなすには、いろいろと資格が必要だ。無線機とか、危険物取り扱いとか。ちゃんと取っていたほうがあとで楽だぞ。」

これって強制的ですか？

「ま、貴様らは初心者だからな。最初はDランクから始めるんだな。資格はいろんなのが取れるからな。最初にとっておいたほうがおすすめだ。S，Aランクになるとまあ、人殺しがでるかもしれんが、あんまり仕事で人を殺すなよ。死体処理とかあとで大変なんだからな。」

ひっ！人殺しだぁ！？じゃぁこっちからも死んだ人とか出てくるんじゃないのか！？えぇ！？マジナンナノ！？聞いてねぇよ！！えぇー！？帰りてぇよ！本気で！！

「次は寮についてだが、基本４人で一部屋だ。これはかってにくじ引きで決めさせてもらった。あくまで文句なしだぞ。なんていったってくじ引きだからな。」

えぇーーー。くじ引きであんな怖そうな人達と一緒になるんですかぁ！？あるいみ奇跡だよね！？

「ここには食堂もあるし、いろいろ設備が整ってるし、なんたって、そこらの高校より断然広い。あ、大事なこと話すの忘れてた。朝、９：００までに教室に着席していろ。食堂が開いているのは、朝は６：００～８：３０、昼は１１：４５～１：００、夜は７：００～

９：００だ。購買はいつでもあいている。消灯時間は１２：００だ。いつまでも起きているなよ。朝の訓練はよほどのことがない限り毎朝５：３０からだからな。このときは先輩も混ざっている。ふふ、先輩は恐ろしいぞぉ。殺気立っている。食堂は先輩達が去ってからいったほうがいいぞ。怪我したくなきゃな。」

はいっ！！俺は怪我したくありません！！！痛いのは嫌いです！ってか、先輩どんだけ恐ろしいんですか！？先輩の権力か！？

「まぁ、ついでに教えておこう1年生は黄色のネクタイで、１００人だ。2年生は白のネクタイで89人だ。3年生は赤のネクタイで74人だ。2年生や3年生は1年生のころ、ちゃんと１００人だったんだ。と、いうことは・・・・・？足りない人数はどこに行ってしまったんだろうな（ニヤリ）」

こわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁl！！えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！その笑い方も含めてこぇーよ！！ちょっ－！この高校やばいって！！こわいって！！帰りたい！！

「おい。お前、なんちゅー顔してやがる。」
「・・・・・。」
「だめだ。ぜんぜん聞こえてねぇ。」

・　　・　　・

あとから聞いたけど、パソコンとケータイとマイクとイヤホンと時

計と無線機とあと・・・・・・なんだっけ。まぁ、いろいろなものが渡されたらしい。
・・・・・・ってかその前に俺は今、危険な状態になっている。
そう、今は寮の中。そしてベットは二段ベット。どちらが上になるのか話し合っているところだ。

しばらくの沈黙。

おい。誰か何かしゃべれよ。全然進まねぇじゃねぇかよ。

「これは、公平にじゃんけんでいいよな。」

よくやった！！蓮！！

「あ、その前におれ、右側のベットがいい。」
「じゃ、じゃあ俺も右側！！」
「じゃ、私とナギサは左側でいいよな。」
「同意する。」

いよっしゃぁぁぁぁぁぁぁ！！

「じゃあ俺は蓮とじゃんけんすればいいんだよな。」
「そういうことだ。」
「じゃんけんっあっちょっと待って。今、念を込めるから。」
「ちっ早くしろよ。」

こういうのは気合だ！！

「「じゃんけんっポン！！」」
「・・・・・・勝った！！」

「ちっ俺が下かよ」

ちなみにあちらのほうはハクが下で、渚が上だった。

このあと、ご飯を食べて、無事に就寝することができた。

☆続く☆

高校生活と寮生活のこれから（後書き）

知らない人達と生活するって緊張しますよね。多分。
読んでくださりありがとうございました。

授業と初めて気づいたこと（前書き）

１０話目です。
よろしくお願いします。

授業と初めて気づいたこと

昨日、自販機に蓮と一緒に行った時のことだ。

「なぁ。この高校ってなんか、すげー変わってるよな。」

「なんていったってスパイや殺し屋をつくる育成所みたいなところだからな。」

「え！？そ、そうだったのか？全然知らなかった！！初耳！！」

「はぁ！？お前、そんなことも知らないでこの高校に入学したのか？お前以外のやつは全員知ってるぞ！」

「マジで！？」

マジかよ。全然知らなかった。なんせ都市伝説しか見てなかったからな（キリッ）

・

・

・

ジリリリリリリリリ！！！！！

「ん？ふぁぁぁぁぁ。朝か。」

どくろは目覚まし時計のスイッチを押した。

「おーい。蓮。起きたか？」

「・・・・・・。」

どくろは蓮のほうに行った。
「おい。起きろって。」
「うるさい。」
イラッ。こいつ、朝弱いほうだな。
どくろは蓮の布団を剥いだ。
「っ！！何をする！！返せ！！」
ドタン　バタン
「ふー。やっと起きたか。」
「ちっ。目覚めから最悪だ。」
イラッ！せっかく起こしてやったのに！
「さっさとジャージに着替えて朝の訓練行こう。わかった？蓮」
「・・・・・・。」
シカトかよ。
やっと蓮は準備が整って外に出た。
「ほらっ！みんなもう集合してる！」
「そうだな。」
こいつ・・・・・・。低血圧で朝、機嫌が悪いめんどくせぇやつだ

な。

朝の訓練は、校庭を１０周して、体操をするだけだった。

「意外と楽だったな。」

「だな。」

どんっ

「うわ。すみません。」

やべぇ。先輩じゃん！

「いや、本当にスミマセンデシタ！」

その先輩は笑顔で、

「そんなに怖がらないでください。余所見をしていた俺も悪いんですから。」

眼鏡をかけた先輩はそう言った。そして友達と思われる人のほうへ走っていった。

「よかったな。優しい先輩で。」

「おう。死ぬかと思った。」

ドスッ

後ろから背中を押された。

「おはよう！巻君、どくろくん。」

咲楽ちゃん！！朝から咲楽ちゃんを見られた！！イヤッホーイ！

「よう。同じ部屋のやつはどうだ？」

「すっごく優しい人たちだよ！」

このあと、食堂で超豪華な朝食を食べた。

「授業だぁぁぁぁ。」

「だな。」

「たしか一時間目って科学だよね。」

教室のドアが開いて、科学の先生が入ってきた。

超ヒョロくて鉛筆みたいな奴かと思ったけど、超ごっついじゃん。

「授業を始める。まず、ノートと教科書の２ページを開け。」

ペラリ

な、なんじゃこりゃ！文字だらけ！！それと少しの図。

「えー。今日の授業は爆弾についてだ。」

いきなり恐ろしいの勉強するんだな。

「昔は、凝った時限爆弾や解体しにくい爆弾が流行っていたが、今は、携帯電話で遠隔操作できるような簡単な爆弾だ。昔の技術も必要だが・・・・・・」

こんなのわかるかぁぁぁぁぁ！！！！
きっと蓮や咲楽ちゃんもわかんないだろ！！
どくろはちらっと右を見た。
な、なんだと！？一生懸命メモってるだと！？
うん。きっと大事な事なんだろうな。俺はスパイにも殺し屋にもなる気はないけど。
・
・
・
キーンコーンカーンコーン
「これで授業を終わる。話したことは全部、重要なことだからな。」
やっとおわったー
「ふぅ。楽しかった！ね、どくろ君。」
え！？あの授業楽しかったか？
「あとで、どのくらいの火薬で人が一人死ぬのか質問しよっと。」
怖いよ。咲楽ちゃん。目がぎらぎらしてる。

・　・　・

「やっと全部終わったー！！！」
「おい、食堂行くぞ。多分、先輩達は食べ終わったころだ。」
「そういえば朝からハク達を見てないよな。」
「俺はさっきトイレで見た。」

廊下を出て、一番奥の右の角を曲がると食堂だ。

「なんだ？やけにざわざわしているな。」
「なんか問題でもあったのかな。」

食堂を見ると、人が白目を向いて倒れていた。
その、倒れていた人の前にハクがいた。

「ハク！？何をやって・・・「何調子こいてんだ！この一年！！」

渚に向かって3年生が右手を振り上げた。
渚は右によけて、両手を固めて、相手の頭に振り落とした。

「ぐぁっ！！」

そのまま気絶してしまった。
渚はそのまま続けようとしたが、

「その辺にしとけ、気絶した人の見分けもつかないほどバカではな

いだろ。」

ハクが止めた。

食堂には、ハク達が怖いのか、人がいなくなっていた。

「どくろ君たちは行かなくていいのか？俺達は人を気絶させたこの中で一番危険な人間なんだぞ。」

ほら、もう帰ろうぜ。な、蓮。

と、どくろが目で訴えかけた。

「別に。黒斬達は喧嘩をふっかけられたから自己防衛をしただけだろ。」

「そのとおりだけが・・・・・・」

どくろはたまたまこんだて表が目に入った。

おっ。晩飯カツカレーじゃん。

「蓮。今日カツカレーだぞ。」

「食べる。」

ハク達は、少し驚いた顔をして、こう言った。

「隣で、食ってもいいか？」

「もちろんＯＫ！！！」

そうだよな。同じ部屋にいる奴に何ビビッてんだ。

でも、やっぱり喧嘩はよくないぞ。怖いから。

☆続く☆

授業と初めて気づいたこと（後書き）

今回は少し戦闘シーンが入りましたね。爆弾に関しては、ガンスリンガーガールを書き写しました。
表現力ないので、わからないと思います（笑）
読んでくださりありがとうございました。

鑑紋ライトと春色咲楽の生活（前書き）

１１話目です。
よろしくお願いします。
ライトちゃんサイドで書きます。

鑑紋ライトと春色咲楽の生活

同じ部屋になった、春色咲楽って子・・・・・・。
腹立つ。
あたしの嫌いなタイプだわ。
なんかぁ、フワフワしてるしぃ、のろまだしぃ、見てるだけでイライラするするんですけどぉ。

「はぁ。疲れる。」
「そうだねっ！」

別に独り言だからぁ、返事しなくていいんですけどぉ。
あぁもう！！イライラする！！

ライトは早く荷物を片付けて、ベットに転がった。

「あ。あたし、ベットここにするからぁ。」

誰も返事しない。
ふん。そんなのもうとっくに慣れてるわ。
前の学校もそんなもんだったから。
ほかの女子なんて、キャーキャーわめくだけのおしゃべり人形。
だから成績も上がらないのよ。天明の名にふさわしくないわ。

「じゃぁ私、ライトちゃんの下で！」
「はぁ！？」

あ、ありえない！！今まであたしなんかにかまってくる奴なんかいなかったのに！！

それに、気安くライトちゃんとか呼んでるわけぇ！？
普通、鑑紋さんとかライトさんでしょ！？
あ、そうか。こいつ、普通じゃないのか。

「あ、ごめん。ダメだったかな？」
「べ、別に。そこがいいんだったらそこでいいんじゃなぁい？」
「うん！私、ここがいい！！」

変わった奴。
よかったわね。女子A，女子B。あたしの下じゃなくて。
ほら、何だか嬉しそうね。
さっきまでヒソヒソと「やだぁ。」とか、「なんであいつと同じ部屋なの。」とかぐだめいてたくせに。
そりゃぁ、あたしだって嫌われていることぐらいわかってる。
でも、誰かと関わると、よけい傷ついてしまう。
あんなこと・・・・・。もう・・・・・。

「ライトちゃん！一緒に食堂でご飯食べよう？」

いやよ。
あたしはハクさんや渚さんと一緒に食べたいの。
あ。でも今日、用事があるとか言ってたわね。
そうね。今日だけ。

「いいわよ。」
「やったぁ！」

なんであたしと食事をするだけでそんなに嬉しそうにするのよ。
うざいわ。
あたしを知ろうとしないで。

・　・　・

「今日の晩御飯はバイキングだって！！」
「そう。」
「ケーキもいっぱいあるよ！！」
「よかったわね。」
「ライトちゃんはケーキ好き？」
「甘いものは何でも好きよ。」

あぁ！うるさいわね！！
よこからペチャクチャペチャクチャ！

「嫌いな食べ物とかある？」
「漬物と生臭いもの。」
「お寿司とか食べれる？」
「無理よ。」

あたしの好き嫌いとかどうでもいいじゃない！！
でも・・・・・・。
ケーキ・・・・・・食べたい。
チョコレートケーキ、ショートケーキ、タルト、モンブラン、ショコラ、フルーツケーキと、アップルパイもあるのね。

「早く行かなくちゃ。」
「ライトちゃん？」

ライトはケーキのある方へ早足で向かった。
おぼん2個にピラミッド状に、各種類のケーキを乗せている。合計５６個。
そして、おぼん4個にチョコレートケーキとショートケーキとタルトとショコラを1ホールずつ乗せた。

「うわぁ・・・・・。すごい量だね。」
「ケーキが好きなの。」

咲楽のおぼんの上には味噌汁とわかめご飯、漬物と玉子焼きと天ぷらという、和食でバランスのよいものだ。

「先に食べててもいいわよ。別にどうしてもあなたと食べたいってわけじゃないし。」
「ううん。ライトちゃんが来るまで待ってるよ。」

本当にどうでもいいのに。
あたしのことなんてほうっておいて食べちゃいなさいよ。

ライトはアールグレイの紅茶に砂糖をおおさじ3杯入れた。
咲楽はちゃんと食べずにライトのことを待っていた。

「なんだ。まだ食べてなかったたんだぁ。もうとっくに食べてると思ったのにぃ。」
「ちゃんとライトちゃんが来るまで待ってたよ！ふふっ。」

ちっ。なんなのよ。こいつ。

「さっ。食べ「いただきます。」

ライトはショートケーキにフォークを刺した。

「ライト？」

この声は・・・・・・！！

「ハクさん？」

ハクさんだわ！！渚さんもいるわ！！

「ハクさん、今日は用事があるって言ってませんでしたっけ？」

「もう終わりましたよ。渚がやけに手際がよくてね。」

「腹が減ったからな。」

あぁ、ハクさんも渚さんも今日も相変わらずお綺麗ですわ！！

「じゃあ、私達はあちらで食事をしてきます。ライトはお友達と食事をしているようですから。」

「とっ！友達じゃありませんっ！！」

そう。こんなやつ、友達じゃないわっ！！

「そうですか。それでは。」

ハク達は去っていった。

「ねぇ。ライトちゃん。」

「何よ。」

さっきの、友達じゃないって言ったこと、怒ってるのかしら。
でも、あなたのせいでハクさん達とお食事できませんでしたのよ。

「なんで敬語を使ってるの？」

・・・・・・はぁ？

「敬語を使ってるのがダメなのかしら？」
「いや、同じ学校だし、そんなに親しいのになんで敬語を使っているんだろうなーって思って。」

そんなこと、どうでもいいじゃない。

「知らないわよ。親しき仲にも礼儀ありってことじゃなぁい？」
「そっかー。」

嘘よ。タイミングがわからなかったのよ。
痛いことを質問しないでくれないかしら。

ライトは、咲楽に話しかけられても無視し続けて食事をした。
見事にケーキを食べ終えて、ライトはハク達の所に行った、

「ハクさん、渚さん。」
「ライト。何のようですか？」
「ハクさん、バレてませんか？」
「うん。大丈夫ですよ。」

よかった。もしバレたら大変なことになるから。

「マフラーは欠かさずしていてくださいね。寝ているときも。」

「わかっていますよ。」
「渚さん。ハクさんを守ってくださいね。ハクさんに誰も近寄らせないでください。もしものことがあってからでは遅いのですから。」
「承知した。」
「本当に心配性ですよね。ライトは。」
「あたしはハクさんが大好きなのですから。恋愛感情じゃないですけど。」

そう。あたしはこれ以上失うわけにはいかないから。

☆続く☆

鑑紋ライトと春色咲楽の生活（後書き）

いろいろと疑問があると思います。
ハクの秘密について、ライトの過去についてなどなど。
まぁ、それはのちのち書きます。
読んでくださりありがとうございました。

あのときの食事と意外なアレ（前書き）

１２話目です。
よろしくお願いします。

あのときの食事と意外なアレ

「隣で、食ってもいいか？」

え、全然かまわないけど。
ってか隣で食べるつもりだったんだけどね。俺。

「ＯＫ！！！」

ハクはほっとした表情をした。

「ほら、早くしろ。カツカレーが冷めてしまう。」
「どんだけ楽しみなんだよカツカレーが。」
「カツカレーは好きな食べ物ベスト１０に入っている。」

ま、カツカレーはかなりおいしいけどな。

「渚も好きだよな。カツカレー。」
「好きだ。」

なんで渚って口が少ないんだろう。
しゃべるの、苦手なのかな。

「いいにおい～！ヤバイ。早く食べようぜ！っておい、まだ待てよ蓮！今にも食いそうだぞ！」
「・・・・・・早く食べたい。早く早く早く早く。」
「待てって。あと少しだから。」
「よし。こちらも準備はできたぞ。」
「じゃ、せーので行くぞー。せーのっ」

「「いただk「「全ての動植物と・・・・・・・」

なんだこの差は・・・・・・！！

さすが天明出身。お坊ちゃんって感じがするぜ。

ブハッ！蓮が戸惑ってる！

ってか食事の挨拶が全ての動植物と・・・・・・で始まるとか漫画でしか見たことねーから！！

「「「「いただきます。」」」」

熱々のカツカレーを口に入れる。

「アツッ！！うまっ！！」

「うん。うまいな。」

「あっつ・・・・・・。

「渚は猫舌だもんな。ふふっ。その顔久しぶりに見た。」

渚、全然熱そうに見えないし

見たか？俺のリアクション。渚から見たらありえないだろ。

「だからぁ、昨日のはたまたまよ！予定が合わなかったからしょうがなくあなたと食事をしただけ！それ以上の何物もないわ！わかる？さっきから同じこと言ってるじゃない！」

「いや、今日も一緒に食べようよぉ。」

「あら？話し声が聞こえないわ。人がいないのかしら？」

「あっ！巻君！どくろ君！」

おっ！咲楽ちゃんと・・・・・・・誰？

「はじめまして。あたしは、鑑紋ライトよ。あなた達はハクさんと

渚さんと同じ部屋に住んでいる・・・・・・・え、と。」
「巻蓮君と天神どくろ君ですよ。」
「そう！そのような名前でしたわ！」

いや、その名前ですけど。
ってかこいつさ、性格悪そう。さっきもなんか咲楽ちゃんに対して態度悪かったし、ハク達を見た瞬間性格がコロッと変わりやがった。嫌な奴。これが男好きって奴か。

「ところであなた。」
「え、俺？」

え、なになに。怖い顔で睨むなって。

「あたしはハクさんの隣で食事がしたいと思っているんだけど。」

・・・・・・で？
俺にどけろっていうことか？

「ライト。食事をしている人にどけろとは失礼ですよ。」
「でもっ！・・・・・・わかりました。あなた。先ほどは失礼なことを言ってしまって、申し訳ないと思ってるわ。」
「は、はぁ。」

そんな棒読みで、しかも無表情で言い、心もこもってない侘びを言われても困るんですけど。
それも名前も呼んでくれないっていう（笑）

「それではあたしは、ハクさんの目の前で食事します。」
「じゃ、私はライトちゃんの隣で！」

おい。そんな嫌そうな顔するなよ。
咲楽ちゃんがよくても俺はよくない。

「あ、私、部屋に財布忘れてきちゃった。売店で買いたいのあったんだよね。取りにいってくるね。」

咲楽は財布を取りに走って部屋に戻った。

「なあ。鑑紋ライトっていう奴よぉ。咲楽に対してちょっとばかり、いや、ちょっとでないな。すごく態度が悪くねぇか？」
「なんですの？」

蓮！？

「さっきから咲楽に対する態度が悪ぃっつてんだよ。」

直球で言ったな。俺、どうなってもしらねぇから。

「あたしからも言わせてもらうけど、正直、あたしもあの子に迷惑しているわ。」
「はぁ？咲楽はお前に迷惑かけてねぇだろ。」
「あたしは迷惑なのよ！あたしに関わってくるし、しつこく付きまとってくるの！それがあたしは嫌なの！嫌って言っても何度も繰り返すの！うっとうしいの！！」
「咲楽、そこまでにしませんか？」
「黒斬、お前は入ってくるな。」
「入ってくるななんて言われても、ライトは私の親しい人だからそれは無理だ。」

え。これヤバイことになってません？
喧嘩のフラグ立ってません？怖い怖い怖い。

「咲楽は中学生のとき、友達がいなかった！いっつも一人だけど、ニコニコしてたぜ！！それが、初めて友達作ろうと思って話かけた奴がこんな態度が悪いやつっだたら咲楽がよくても俺はイライラしてたまらない！」

「そんなの、あたしには関係ないわ！」

咲楽ちゃん、そんなつらい過去があったんだね。
おさななじみの蓮しか頼る奴がいなかったんだな。

「私さぁ、そっちの都合のいいように言いくるめられることが大嫌いなんだよな。こっちの事情も聞こうとしない。そうだろう？自分のほうがかわいそうだ。不幸な人なんだって、悲劇のヒロイン気取られても困るぜ。」

あれ？ハク、なんか雰囲気変わったか？
オーラが入学試験みたいだぞ。

「お前らは天明のトップだろ。別に嫌なこともないだろ。全てが充実してんだろ？」

「充実なんかこれっぽっちもしてねぇよ。」

え？本当に？リア充してないの？マジで？

「ライトはな、お母さんがお父さんを殺害、預けられた家でも家庭内暴力、学校ではいじめを受けていたんだ。最悪だろ？そっちとは比べ物にならないくらい。」

沈黙。
そして、喧嘩の原因となった人物が現れた。
「あれ？みんな、まだ食べ終わってなかったの？財布捜してて結構遅くなったのに。」
・・・・・・咲楽ちゃん、今回の喧嘩の原因はあなたのおかげですよ。
俺なんかビビッちまって全然しゃべってない。
空気読んでください。オネガイシマス。
「咲楽、売店でなんか買え、飯は別なところで食え。」
咲楽は雰囲気をなんとなく察したのか、
「うん。わかった。メロンパン買う。」
何でメロンパンを買うことを宣言したのか意味不明なんですけど。
メロンパンっておいしいよね。どちらかというとチョコチップメロンパンが好き。
「殴り合いの喧嘩でもするか？」
「お互い、どちらも譲らぬようならば構わないが。」
えぇ～。殴り合いの喧嘩って・・・・・・。やっぱりこうなる感じ？
どくろは一応1メートルその場から離れた。
どちらも同じタイミングでその場から動いた。
蓮は、足を引っ掛けようとしたが、ハクはジャンプしてかわし、かかとおとしをした。

だが、足を掴まれ、下段回し蹴りをされた。

これ、全然殴り合いの喧嘩じゃねぇじゃん！！
ただの漫画に出てくるような戦闘シーンだよね！？

仰向けになったハクの上に、蓮が乗っかり、マウントパンチを繰り出した。
※マウントパンチとは、仰向けになった相手の上に乗り、その状態から繰り出すパンチのこと。

だが、ハクはそのパンチを寸のところで避け、蓮の腕を掴んで後ろに投げた。

うわ！なんちゅー腕力！！常人じゃねぇ！！

蓮はすぐに立ち上がったが、肘打ちからの左フック、そしてボディフックを蓮の腹部に当てた。

「グッ！！」

蓮は、倒れこみそうな痛みをこらえて、体制を整えて相手の動きを見た。
ハクは中段を蹴り、素早く上段を蹴る、二段蹴りをしたが、すべて避けられてしまった。

「はぁっ！！」

蓮は首投げをしようとしたが、ハクの上段回し蹴りによって防がれてしまった。

「くっそぉ！！」

その一瞬の隙を、ハクは見逃さなかった。
蓮にタックルをして、足で首を締め上げ、三角締めをされた。

「ぐっ！！がぁ！！」

「痛いよな。痛いに決まってる。閉め技だからな。」

そのまま蓮は気絶してしまった。

「喧嘩を売った割には案外そうでもなかったな。」

どくろは蓮に駆け寄った。

「おい！！大丈夫か！？」

「無駄だぞ。気絶してるからな。」

くそ！！俺はビビッて動くこともできなかった！！

「さすがですわ！！すごく強いですわ！！完璧ですわ！！」

「じゃ、私は帰る。行くぞ。ライト。・・・・・はぁ。渚、お前、この状態でカツカレーを5杯も食べていたのか？」

渚の横には食べ終わった皿が5つ重なっていた。

「かなりおいしかった。」

どくろが見たのは、蓮が咲楽に対する、ハクがライトに対する、それぞれの愛だった。

☆続く☆

あのときの食事と意外なアレ（後書き）

戦闘シーンを書くときが一番楽しかったです。
まだまだ謎が多いですが、がんばって書いていきたいと思います。
読んで下さり、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8746z/

高校生活と探し物

2012年1月2日02時48分発行